
愛と剣とハナミズキ

ハヤブサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛と剣とハナミズキ

【Nコード】

N6344K

【作者名】

ハヤブサ

【あらすじ】

僕は吸血鬼に恋をした。
ただそれだけのお話。

序章

彼女は吸血鬼^{ヴァンパイア}だ。

僕は彼女の事を愛した。

僕は勇者。魔物狩りの最盛期だった。

僕はフェールという名で動いていた。

「フェール！今度は西の山をお願い！一流魔物だからサッサと始末してきてー！」

「はいい！」僕は上司の叫びに応じた。

勇者と言っても、ある会社の社員であってそんな位のいい者ではない。

僕は愛用の剣を担いで走っていった。

僕はある勇者株式会社に派遣されていたが、『薬草ショック』という薬草価格高騰によって、会社の余裕がなくなり、派遣切りされたため、職を探していたら『格安！勇者』という胡散臭い会社に拾われた。

勇者も楽じゃない。

人間は・・・いや、魔物は追いつめられると何をするかわからない。僕に依頼された魔物退治をするべく山に行き、首尾よく魔物を見つけたが・・・。

勝てないと知ると、自爆したのだ。

僕はHPが0になった。

つまり死んだ。

『俺は死んだのか・・・』僕は意識の中で呻いていた。

『誰か教会に運んでくれないかな・・・』

「お目覚めですか？」

「う、うつん・・・。はっ！」僕は目覚めた。
僕を蘇生していたのは少女だった。

「貴方は・・・シスター？」僕は一応訪ねる。
「いいえ」彼女はさわやかに答えた。

ヴァンパイア
「吸血鬼です。」

第一、取引

「ヴァンパイア!?」僕は驚いて飛び退こうとしたが、体が動かない。

・・・縛られている。布団にしっかりと。

「フッフ、こちらは貴方が何者かもすっかり把握してますわ。」

少女は悪魔のように笑う。・・・というより悪魔なんだよな。

「私はいつでも噛んで差し上げてもよいですよ。」

少女は牙をむきだしにした。

「しかし噛みません。」

「なぜ？」思わず訪ねてしまう。

「取引があるのです。」

僕はしばし考えてみる。

1、断る

2、賛同した振りをして、ばっさり行く。

3、賛同して様子をうかがう。

僕としては2は魅力的だが、一応勇者なのでそうはいかない。とりあえず1を試してみる事にした。

「断る。」僕は言いはなった。

「ならば・・・。」彼女は股の辺りで何かしている。

まさか・・・伝説の拷問術をつ!!

「や、やめろっ!それだけは!」僕は慌てて言った。

「では、飲んでくれるのですね。」

彼女は悪魔だった。

「私の条件は山奥のオルクという魔物を倒して欲しいのです。」

「オルク・・・。」僕が呟く。ちなみにひもが解かれていないので寝たままだ。

オルク・・・確か悪魔族では中くらいの力があつたはず。

一応倒せるかな……。うーん。

「よし、わかった。」僕は頷いた。

「でしたら、『誓い』を立ててください。」彼女は言う。

そこまでするか？普通。仕方がない。

「わかった。俺はオルクを倒しますと誓います。その間貴方に危害は加えず、同行します。」

一応誓ってやった。

彼女は僕を縛っていたひもをほどいた。

「俺はフェール。君の名前は？」僕が訪ねる。

「ハリア。」彼女は立ち上がったて微笑んだ。

その微笑みは天使のようだった。

ハリアは山中を軽やかに駆けていった。

僕がその後を追いかける。

タツタツ。ガシツガシツガシ。

二種類の足跡が響き渡った。

彼女はなかなか可愛かった。

ヴァンパイアのくせに生意気な……。

と知らず知らずのうちに思っていた。

しかし一方で心の片隅では彼女の事を想っていた。のかもしれない。

でも僕は認めなかった。

勇者と吸血鬼の恋なんて……。

そのうち問題の洞窟に着いた。

「この中にオルクがいるわ。」ハリアが振り返って言う。

確かに不気味なうめき声がある。

僕は静かに剣を抜いた。

やつまで約15歩。薄暗いが、輪郭は見える。

ヒタヒタヒタ。

12歩。気づかれなければ行ける。

ヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタ。

あと4歩。舌なめずりして剣を構えた。

一気に踏み込み思いつきグサツといった。

が、オルクは微動だにしない。

剣を構えながら油断せずオルクに触る。

死んでいた。

さっきまで苦しんでいたらしい。

しかし変だ。僕はふと思った。

皮膚の色がおかしい。この色と独特の香り。

毒・・・？

はっと僕は気づいて咄嗟に叫んだ。

「ハーリア、逃げろ！」

その時、地響きがおきた。彼女がよろめき倒れる。

頭上から、石やら岩やらが崩れて落ちてきた。

「くっ・・・炎陣、《大爆炎》！！」

術を即座に唱えた。爆風が岩を吹き飛ばす。

逃げる時間ぐらい稼げるか・・・。

僕はハーリアに駆け寄って抱きかかえると一目散に逃げた。

第二、ヴァンパイアとの生活

「うつつ、」

「起きたかい？」僕は訪ねる。

「ここは？」「君の小屋さ。」

僕はハーリアに布団をかけ直した。

「一体何が？」彼女が訪ねてくる。

「カインの仕業だね。」僕は説明した。

「カインは雑魚の分類にはいるけど、恐ろしい毒をもっている。オルクもそれにやられていた。」

「ふうん。オルクは死んでいたのね。」ハーリアは言う。

「そゆこと。さて、僕は帰らせてもらうよ。」未練があつたが僕は立ち上がった。

しかしドアが開かない。

「ハーリア？誓いは果たしたよ。」僕は怪訝そうに聞いた。

「いいえ、貴方は『倒し』てはいません。」ハーリアは笑った。

「貴方はまだ私と一緒にいるのです。」

正直うれしかったが、いろいろな面で困った。

まず一つ、彼女がヴァンパイアであるから油断できない。

二つ、彼女はちよいとばかり意地悪だ。

三つ、・・・これが一番大きい。

彼女が異性である事。

つまり変な風に意識してしまうのだ。

彼女はルックスもいいし、いい子だし。

だってあれだ・・・そう。

女の子と小屋で二人つきりだからな。

まあ、よくある展開で割り切ってしまったたらおしまいだが。

ただ彼女が彼女なりに大変だという事がわかった。

まず彼女の両親は勇者に殺されたことがわかった。

勇者を恨まないのかと聞くと彼女は答えた。

「だってそんなの気にしていたら生活がみじめだよっ」

わざと明るく言ってくれたのだろうか？でもおかげで気分が少しは晴れた。一緒にいていいんだ・・・。

それにこの辺りは異文化の魔物が入りこんでいるらしい。

オルクもそうだ。

やはり違う物が入ると食物連鎖に変動が起きて絶滅する種もあるらしい。

魔物の視点で見ると、意外な点が多かった。

二人の生活が始まって1ヶ月が経過した。

恐らく会社では僕が遭難した事になっているのだろう。

さて、今日も僕は外来種を狩って、彼女はそれを調理して一緒に食べた。

ちなみに彼女は血のワインを飲んでいる。

最近僕のことをよく見るようになった。

やっぱり人間の血がいいだろうか・・・。

僕は逃げたくても逃げられない。

この日の昼下がりはのびのびとしていた。

僕は野獣の骨で武器をこしらえていた。

ハリアは台所で何か作っているようだ。

何となく、夫婦みたいだな。

なんて妄想をしてみたり・・・。

「フェール？」

「あ、ごめん！」僕は意識を戻した。

「何考えていたの？」彼女が小悪魔のような笑みでのぞき込んでき

た。

「フッフ、他愛もない事だよ。」僕は答えた。

「そう。」彼女はそのまま僕の隣に座り込んだ。

心拍数が急激に上昇する。

「どうしたの？顔が赤いよ。」彼女がのぞき込んでくる。

「・・・何でもねえよ。弟のことを思い出したただだよ。」ボソボソと言いつづけた。

ああ、畜生可愛いじゃないか！

どうしたらいいんだ。全く！

「へえ、弟なんていたんだ。どんな子？」

僕の心臓は慣れない異性が隣にいて興奮状態だが、ハーリアは気付くはずもなく問い続ける。

こういつ時ってどうしたらいいんだろう。

男のマニユアルってないのかよ！

「あ、ああ、ひねくれていてな。好奇心旺盛の坊やさ。危なっかしい奴だったよ。確か・・・。」

心境を落ち着けるために僕は思い出話を語っていると、肩が重たくなった。

スー、スー。

規則正しい寝息が耳元に響く。

僕はため息をついて彼女の頭を支えつつ立ち上がった。

そして彼女の体を持ち上げ、布団に運んだ。

彼女の寝顔を見ながらため息をついた。

完璧こいつに惚れてる・・・。

第二、ヴァンパイアとの生活（後書き）

ハヤブサです。恋愛物にも着手しました。
どうぞよろしく。

桜の咲き乱れる日でした。

第三、彼女の唇は血の味がした

しかし考えてみると、他の魔物もいる。

つまり勇者がここに住み着いているのはわかってしまう。

そう・・・もうすではばれていたのだ。

今日は雨が降っていた。

「ねえ、外が騒がしくない？」

ハリーアが言う。彼女はハナミズキの花を飾っていた。

「確かに・・・。雨の音にしてはうるさいな。」

僕は剣をつかみながら窓に近づく。

と、その途端、

太鼓の音。

「各々方、討ち入りでござる！」

魔物がドアを破って侵入してきた。

僕は咄嗟に彼女を自分の背中に隠しながら、剣を抜き払った。

「裏切り者が。ヴァンパイアと思って無礼行為にも一目置いていたが、今度は完璧な裏切りだ。」

ゴブリンが吐き捨てる。複数の魔物が賛同の叫びを上げる。

「野郎共！切り捨てろ！」

こちらに殺到してきた。

・・・MPは温存しなかったな。そう思いながら印を結んで叫ぶ。

「炎陣、《大爆炎連弾》！」

床から爆炎がいくつも上がった。ドカンドカン！盛大な爆発音が響く。

「ハリーア！」

叫びながら彼女の手を握り駆け出す。

「えっ、ちよっ！」

僕は窓を蹴破って、外に出て数m走ると、ある軍団に会った。

「フェール!」「先輩!」

派遣会社の時の先輩勇者が魔物の軍団の討伐に来たらしい。
と、後ろから魔物が来る。

「この少女が森で迷っていて、一緒に森を出ようとしたらあの連中
が……。」

僕が咄嗟にでつち上げると

「おっしや!まかしとき!」と叫んで軍団を引き連れ戦い始めた。

僕らはその戦の脇を素早くすり抜けて行った。

洞窟。僕はハナミズキを見つめていた。

「大丈夫か。」僕は聞く。

「……。」無言。

「どうした?」彼女の顔をのぞきこむと
泣いていた。

「ええっ!いや!俺は何も……。」咄嗟に僕は弁解した。

「どうして?」彼女はポツリと言った。

「ん?」

「どうして私を助けたの?」

考えてみればそうだった。

彼女を放っておけば彼女は死んで僕は誓いから解放されるのだった。

「私……。また裏切られるのかと思った。あのときみたいに……。」

彼女は言った。『あのとき』について今は聞かない方が良さそうだ。
しかし『あのとき』のトラウマがフラッシュバックしたようだ。

「なんで……助けてくれたの?」

僕は考えた。いろいろな面から。そして結果は一つにまとまってしまっ

どう答えようかな。回りくどい手段は嫌いだし……。

一瞬、躊躇した後、思い切って僕は立ち上がり、ハーリアの体を抱きしめた。

そして耳元でささやく。

「俺が・・・君の事を愛しているから・・・かな。」

それが僕の出した・・・結論だった。

「私も・・・かも。」

彼女は顔を真っ赤にしながら言った。

「キスしていいかな。」僕は大胆に言ってみた。

「牙に引っかけたらヴァンパイアになっちゃうよ。」
くすりと彼女が笑った。

「構うものか。」

僕らは顔を近づけ柔らかい口づけをした。

彼女の唇は真っ赤な血の味がした。

ハナミズキが・・・可憐に咲いていた。

まるで、彼女のように。

第三、彼女の唇は血の味がした（後書き）

ハヤブサです。まだ続きますが今後はなかなか更新しないと思います。でもよろしく願います。

終わりにき終わり

僕らは場所を転々とかえた。

大概、山に住み込んだが、魔物や妖怪に襲撃され、居住まいを頻繁に変えねばならなかった。

町にも住んでみたが、都市に入るとハーリアはすぐに体調を悪くしてしまった。

本で調べてみるにヴァンパイアというのは元々、水が苦手で、拒否反応を起こしてしまうらしい。

山の湧き水は大丈夫なようだが、都会の水は汚いので飲めないようだ。妥協策としてはハーヴを入れれば問題ないようだが、この『薬草シヨック』の御時世、容易に手に入る物ではない。

仕方ないので、僕らは山に近い集落に住み着いたが、集落の民族はよそ者を嫌う所が多いおかげで、放り出され、また居住まいを転々とせねばならなかった。

「ごめんね。私の体質のせいで。」

森の中の洞窟に入ったとき、ハーリアはうずくまりながら言った。

「何言ってるんだ。気にすることはないよ。」僕は笑った。

「前の生活より楽しいしね。それに、僕が勝手についてきているだけだから。」

そう、この前、彼女は誓いを打ち消して、姿をくらませようとしたのだった。

しかし、こんなので勇者を振り切ろうとは百年早い。

僕は彼女の後を着いていったのだった。

「ふふ、そうね。」彼女は微かに微笑んだ。

「ここに定住できればいいね。」僕は洞窟を見回しながら言った。
「ええ。」

しかし、またもや、魔物達は勇者の気配に気付いてこの洞窟を襲撃してきた。

僕らはやむを得ず、森を抜けて、近くの集落に逃れた。

「不思議な集落ね。」彼女は囁いた。

「ああ。」僕は剣がいつでも抜けるように構えながら動いた。集落の中に入ったが、人が全然いない。

集落の半ばに差し掛かった時、一斉に太い声が響いた。

「水陣、《魔水牢》！！」

一気に術で周りを水で囲まれてしまった。

「くっ……。」僕は剣を抜いて辺りを見回したが、隙間は少しもない。

「フェール……。」ハリアが力無く崩れ倒れた。

「おい、大丈夫か！？」僕は彼女を抱え起こした。

「この水……何だか……気持ち悪い……。」

僕はハツとした。まさか……聖水の類か！！

早く脱出せねば彼女が持たない。一か八か《大爆炎》で周りを吹き飛ばすか……。

覚悟を決め、印を結んで術を唱えようとしたその時、水の一部が開いた。

外から老人が一人入ってきた。ハスキーな声で喋る。

「すまないNE。私は武川。ここの公安委員会長のような物をやっているYO。」

「何？」僕は剣を片手で構えながら言った。

「その彼女、ヴァンパイアでしょ？だから、ちょっと閉じこめたのSA。でも、いい人そうNE。」

「うう……。」彼女が呻き声を上げて激しく身動きした。

「おいっ！！大丈夫か！？」僕は支えきれず膝についてハリアを

降ろした。

「術解！水陣、《癒しの水》」武川は老人と思えぬ俊敏さで近寄って、印を結び、術を唱えた。

そして、彼が差し出した手から水が流れ出て、彼女の口に入っていた。

「《癒しの水》？」

「そうだＹＯ。君らは悪そうじゃないＮＥ。村に入れて大丈夫ＹＯ。暫く暮らしたらどう？」

その時、ハーリアがむくつと起きあがった。

「大丈夫か？」僕が屈んで様子を伺う。

「うん・・・何か、力が漲ってくる感じ・・・ここに暮らしてもいいかも。」

「そうか。じゃあ・・・お世話になります。」

僕は頭を会長に下げた。彼は微笑んだ。

そして、会長が集落のはずれの小屋を提供してくれた。

「やれやれ、やっと落ち着いたな。」僕はソファでくつろいでいた。

「そうね、ここはとってもいいところ。」ハーリアは牛の血をなめながら言う。

ふと壁を見るとハナミズキが飾られている。

ハナミズキは・・・嫌いではない。

トントンとドアがノックされた。

僕は立ち上がり剣に手をかけながらドアを開けた。

「こんにちは！って物騒やな。剣なんて。」

とにかくハイテンションなやつが入ってきた。

「誰？」僕は聞く。

「いろいろな名があるけどコウヘイって読んで頂戴。ここにサインをお願いします。住居表です。」

僕は二人分の名前を書いた。しかし、変な奴だな・・・。

「これは『魔連絡機』です。使い方はこちら。」

コウヘイは変な機械を渡した。あと冊子も。

「隣に住んでいるのでよろしく。」

彼は外に出ると素早く穴蔵の中に潜っていった。

彼は颯爽としていた。あまりかつこよくはないが。

「へえ、立ち寄った町で見た事あるけどこれだったのね。」

ハーリアがしげしげと魔連絡機を眺めた。

と突然そいつが震え、音を出し始めた。

彼女は咄嗟に飛び退いたが、僕は落ち着いてボタンを押した。

「おっ、よく使い方わかつているね。」

そいつの中からコウヘイの声がした。

「電話する時に使うからいつも持っていてね！」

とあいつが言うのとプツツと電話が切れてしまった。

「愉快な人みたいね。」ハーリアは言う。

「愉快すぎるな。」僕も言う。

僕は突然笑いがこみ上げてきて笑ってしまった。

彼女も天使のような笑みで笑った。

「ナンパされちゃうかもね。」彼女が囁く。

「ナンパされても・・・。」僕は彼女を抱きしめながら言う。

「俺が守ってやるさ。」

そうして僕らは永遠に一緒なのだ。

誓約のように僕らはキスをした。

あの時のように彼女の唇は・・・真っ赤な血の味がした。

ハナミズキは輝いていた。

まるで・・・彼女のように。

終わりになき終わり（後書き）

ハヤブサです。

実はこれサイドストーリーだったとか・・・。
全ての道はローマに続く。

彼らはどう進むのでしょうかね。

書くのがちょっと下手でしたけどどうでしたか。

感想くださいね。

ではまた。

なお、彼らの今後の活躍は『僕は魔法使いになった。そして戦う。』
でも見られます。

そして、始まりの帰宅。（前書き）

8ヶ月ぶりの更新です。

やっぱり、彼らの冒険は終わりにさせません。

そして、始まりの帰宅。

「ふう・・・平和になったな。」僕は元住んでいた小屋の前に着いた。

「いろいろ・・・大変だったわね。」ハーリアは微笑んだ。
ガチャ・・・数年ぶりに小屋の戸は開かれた。

僕らは、この小屋を快く貸してくれた会長のために働いた。
その活躍は、弟の方がよく知っているな。
世界を救わんと戦い、まさに救ってきた。
そして、久しぶりに暇が与えられたのだった。

さすがに、2、3年放置していただけあって、埃が蓄積されていた。
「さて、掃除するか。」僕は鎧をはずして埃まみれのソファに置いて言った。

「ええ、そうね。」

僕らは倉庫にあったモップと雑巾を取りだして掃除を始めた。

埃程度なのでスイスイとモップで取って行けた。

家具などはハーリアが雑巾で丹念に汚れを拭き取っていた。

床を拭き終わって、僕も雑巾を取って手伝おうかとした時、彼女が何かを見つめているのに気付いた。

僕が近づくと、彼女は微笑んでそれを見せてくれた。

ハナミズキの押し花であった。

「懐かしいわね・・・あの日のこと。」

「ああ。」彼女の故郷の暮らしのことを思い返すと何だか感慨深い。

「あ、行けない。掃除やらなきゃ。」

「おう、そうだった。」

僕らは我に返ると、雑巾でいろいろな家具磨きを再開した。

大体の家具を綺麗に磨くと、彼女は外で布団や衣服を洗い始めた。

洗濯板でゴシゴシとＴシャツを洗う姿を見ると、また、あの暮らしを思い出した。

でも、今の暮らしの方が幸せだな・・・。

彼女が軽く術を使って乾かした布団を運び込んで、拭いたばかりの床にドサツと置いた。

僕も、我に返って、箆笥のひどい汚れに雑巾で挑んだ。

さすがに2、3年放置した洗剤は使えないので手で磨くしかなかった。

が、力を入れて擦れば、なかなか綺麗になる。

「綺麗になったね。」彼女は家具を磨く僕の後ろで言った。

「ああ、お前もな。」

「・・・。」ん？

僕は沈黙を不審に思って振り返ると、彼女がおもむろに抱きついてきて熱烈なキスをしてきた。

僕は少々戸惑いながらも、彼女のキスに答える。

彼女の舌が僕の中に入ってくる。

そして、お互いの舌が絡み合う・・・。

僕らは勢い余って、倒れ込んでしまった。

・・・彼女が取り込んだばかりの布団に。しかももつれて、彼女を押し倒したような形になった。

「おう、すまん。大丈夫か？」僕は慌てて身体を起こしながら言った。

しかし、彼女の腕が絡んでいるので、起きあがれない。

彼女は潤んだ瞳で僕を見つめる。そして僕も見つめ返す。

・・・ふう、何だろうな。妙な気持ちになる。

僕らは静かに服を脱ぐと、抱き合った。ほぼ、成り行きである。真つ昼間からこんなことをしていると忍になんて言われるかな。まあ、お互い様だろうな。多分、あいつもやっているだろうし。心のうちで僕は苦笑した。

しかし・・・ハーリアの身体を初めて見たが、綺麗な形をしているものだな。

何回か、間違つて女の裸を見たことはあるが、こんな美しくはなかった。

胸や腰は丸みを帯びて、足の筋肉が柔らかく美しい。

そして、何より、肌が白く柔らかい。

美術では言い表せない美がここにある。

恋愛感情というレンズを透かして見ているせいかも知れないが、多分この美しさはヴァンパイアそのものが持つ美しさなのだろう。

そんな美しい身体を愛撫していくと、彼女を軽く喘ぎ声を漏らし始めた。

感じてきているっていう奴なのか・・・？チラツと僕は思った。

「ねえ・・・入って・・・きて。」彼女は喘ぎながら囁いた。

「いいのか？」僕は問いかけた。

お互いの瞳と瞳が合い、意図が通じる。

そう、ヴァンパイアと人間の子はダンピールと呼ばれて、迫害されるのだ・・・。

妊娠する確率はなきにしもあらずなのだ。

「大丈夫よ。」彼女は可愛らしく微笑んだ。

「貴方となら・・・。それに今の時代はあまり関係ないわ。」

「そついうのなら。」遠慮無く。

ズブズブズブとイヤらしい音を立てて、彼女の中に入っていった。

「あう・・・ジンジンする・・・。」

彼女のアソコは何かを絞り出すかのようにきつくなってきた。

そして、僕の中から何かが放出されようとしている。

「う・・・行くぞ・・・。」

「うん。」

そして、自分の中から勢いよく何かが放出された。

「んあああああっ！！」彼女は叫び声を上げ、ビクビクツと痙攣した。

はああ、とお互いの疲れたような息をついたが、不思議と快感を帯びた息だった。

「んー、気分がいいわ。久しぶり。こんな気分。」

「そうかそうか。平和に、なったんだな。」

全て掃除を片付けて、外のテラスで夕食を取っていた。

「ん、これはまた豚肉の血のスープ？」

「うん。美味しいでしょ？」

「・・・まあ、少しクセがあるけどね。」

他愛のない話で盛り上げられる。こんな生活は久しぶり。

専ら、この三年間は、戦場だったからなあ。話すときは滅多になかった。うん。

「ねえ。」

「ん？」

「また、夜にやろっ！」

「またかいな。まあ、いいけど。」

「やったあ！！」

・・・こんなことも出来るのも平和なのかな？きつとそうだろうな。

そして、始まりの帰宅。（後書き）

ハヤブサです。

終幕しましたが、何となく、『魔法使いシリーズ』の本編ではなかなか火影が出てこない！！

ハリアアの人気も結構います。

よって、復活したこの物語です！！

この後、どういう筋書きがいいか、こつこつ一悶着が欲しいと言って頂ければ有り難いです。

今の所、通常の生活が続いていく予定です。

と言う訳で、お便り、感想、待ってます。

弟の訪問

洗ったばかりの布団で気持ち良く起きた。

「ん・・・おはよ。」僕の腕の中でハーリアが微笑んだ。

「おはよ。」彼女の頭を撫でながら挨拶を返した。

僕らは布団から出ると、衣服を身にまとして朝飯を食べた。

以前と変わらぬ狩りと採集の生活である。

「うーん、鹿肉最高。」ハーリアは豪快に食いちぎりながら言った。昨日狩ってきた牡鹿の肉を丸焼きにした物である。朝からお腹にもたれそうだ。

「今度、また狩ってくるからな。」

「ありがと。」

僕も少々、肉を口にした。意外とあつさりとした脂が旨い。

こういう生活で便利なのは、食器があまり必要ないことだ。

現に自分の家には、皿が二つとお椀が二つ、木のさじが二つとフライパンと鍋しかない。

少々、不便するときもあるが、いざとなれば、木で即興で作れる。

結構、有意義な生活である。

食事の後かたづけを終えると、ドアがノックされた。

「ハーイ。」ハーリアがタタタツと駆けていってドアを開けた。

「あ、こんにちは。」聞き慣れた声。

「よお。良く来たな。」

我が弟、忍である。シオンちゃんもいる。

「で、何用だ？」

「んな、焦るなって。ハーリアさん、剛から。」

忍はいつものように暢気だ。ハーリアになにやら小瓶を渡した。

「ん、何だろ。あ、血だ！」ハーリアは喜んで台所にしまいに行った。

「そつだ、お茶出すから待ってて。」

「あ、手伝います。」シオンちゃんはスタスタと台所に入っていた。

「兄さん、どこまで言ったのさ。」ニヤニヤしながら忍は聞く。

「どこまでって?」

「またまたとぼけちゃって。で、まあ、兄さんも成人だからこれを持ってきてやったって訳。」

ほら、と一枚の印紙を渡された。

『結婚のすすめ』

「・・・俺らに結婚しろと?」

「身を固めた方がいいよ。現に僕らもそつだし。」

あ、そうか。忍とシオンちゃんはもう結婚しているんだっけ。

「そうか?」

「うん。そつだよ。」と言つてもう一枚、紙を取り出した。

『婚姻届』

「しかし、公にしなくても・・・。」

「いや、公にした方がいいって。ナンパ防止になるし。」忍は真面目な顔で言う。

「いいんじゃない?」いつの間にかハリアが戻ってきていた。

そして、紙に『ハリア』と丁寧な字で書き込んだ。

「ほれほれ。」とはやし立てる忍。

「炎陣、《鬼火》」小声で術を唱えた。

「あちつ!」忍の額に小さな火が飛んでいった。

「ひでえなあ・・・」と言つのを尻目に僕は『光 火影』と書き込んだ。

「ほら、これで満足だろ?」ピツと婚姻届を忍に差し出した。

彼は懐にしまつと次は冊子を取り出した。

「んー、今度は何だ?」多少うんざりしながら覗き込むと

『式典会場パンフレット』

「どれがいいかな?和風か洋風か・・・。」

「炎陣・・・」

「あー、もう分かったって。もう。」彼は術を聞くと慌てて言った。
「なら良し。明日、決めたやつを送るから。伝書鳩で。」

「ハイハイ。みんな呼んでおくからさ。」

「・・・はあ。」

「忍、からかい過ぎよ。」シオンちゃんが注意したが、彼女も顔がにやけている。

「さて、今日は泊まっていくか？部屋は空いてるぞ。」

「いや、いいよ。二人の邪魔したら悪いし。」

忍はニヤツと笑うと、マントを羽織って外に出た。

「邪魔したな。」「お邪魔しました。」

二人は出て行った。何とも嵐のような奴だ。

「ねえ・・・それでどうする？」

「そうだな・・・。」

僕は僕の部屋でパンフレットを眺めていた。

「やっぱり、和風かしらね。」ハリアがそのページをめくりながら言った。

「でもヴァンパイアは西洋の方だからな。その方がいいんじゃない？」

「ん・・・でも風土に合わせた方がいいし。」彼女は目を伏せていった。遠慮している証拠だ。

「遠慮するなって。俺らが出会ったのも西洋だからさ。」

僕はパラツと西洋の式典が書かれたページをめくった。

『西洋・・・教会での神聖なる儀式。』

「でもなんか、日本だからドンチャン騒ぎしたいよな・・・。」

僕は呟きながら、冊子をペラペラめくると、ページの間からハラリと何かが落ちた。

拾い上げて読んでみた。忍の筆跡だ。

『兄さんにはこれがオススメ！魔法族結婚式。p13を参考！』
そう書かれている。

冊子の13ページをめくると、魔法族結婚式とやらが書いてあった。要約すると、自分なりのアレンジが出来る儀礼にこだわらない式らしい。

「これいいわね。」ハリアが覗き込みながら言った。

「ん、確かに。これでいいかな?」

「いいわよ!」笑顔満面ではしゃいでいる。可愛い奴だ。

その笑顔に堪らなくなり、抱き寄せて唇を奪う。

そして、ベッドの中に倒れ込んだ。

夜は、まだ長い。

結婚式準備

忍に伝書鳩を送ったら、彼はすぐに対応を始めた。式は武川会長の館で執り行うことになった。

「えっと、招待状はこっちから送るから。これがリストね。」

巻物を広げながら忍は言った。見知った名前がズラリと並んでいる。「で、司会の中野先生がやってくれるから。シナリオは大体書いたから目を通してね。」

また忍は巻物をバツと広げた。式の進行のシナリオが書かれている。「へえ、随分手際がいいのね。」ハリアがシナリオに目を通しながら言った。

「そりゃ、姉さんのためだもん。」悪戯っぽく忍はウィンクをして言った。

トントン、と控えめなノックが聞こえた。

「どうぞ。」ハリアはドアに向かって言うと言った戸が開いた。

「こんにちは。」

「ああ、剛隊長！」僕は反射的に立ち上がった。

「隊長なんてよして下さいよ。」苦笑いをしながら、剛さんは入ってきた。

彼は外からスーツケースを引っ張り込むと、それを開けた。

「ヴァンパイアにはこれが相応しいと思ひまして、紅蓮の谷から取り寄せました。」

「おお。」思わず感嘆の声が漏れた。

中から出てきたのは、鮮やかな真紅のドレスだった。フリルまで付いている可愛い奴だ。

「わあ！素敵！」ハリアはドレスをうっとり眺めた。

「火影さんには、これですね。」剛さんは次の物を取り出した。漆黒の魔法衣装だった。儀式用であり、禍々しい物は引き寄せない

という。

「おお！高かったんじゃないんですか？」サラサラとした肌触りを感じながら言うと、

「これは、玄武村の人から借りてきたんです。」と、彼は苦笑した。「ありがとうございます。」僕は深々と頭を下げた。

「で、では、僕はッ！」あからさまに狼狽して彼は出て行った。「褒められるのに、慣れてないんだよな・・・。」

外でドスンドスンと階段から転げ落ちる音を聞きながら俺は言った。「あ、そうだ。忘れる所だった。」忍はサッと冊子を取り出した。

「これ、結婚式の手順。ちゃんと確認してよ。」俺は試しに何ページか捲ってみた。

「・・・これでいいのか？」明らか不自然だ。「いいんだよ。魔術師式だってさ。」

武川氏から借りた。と平然な顔で言った。

「・・・お前、結婚式の時もこんな風にやるんだろ？」

「ああ、まだ17だから出来んけど。」忍は言いながらため息をついた。

「さて、そろそろ帰るか。」彼は立ち上がった。

「ん？随分早いな。」

「ちよつといざこざがあつてね。」彼は微笑むと、マントを羽織った。

「じゃあ、失礼する。」

「ああ、じゃあな。」

挨拶をすると、彼はシオンちゃんと手を繋いで帰っていった。

「何たる？いざこざって。」ハリアが不思議そうに首を傾げた。「また面倒を起こしたのか？」

「んー、かもしれないね。」彼女は微笑んで言った。

「でも、貴方を巻き込まないようにしている辺りはお兄さん想いね。」

「誰が？」

「忍君よ。」

「まーさかあ？」俺は苦々しく言った。

しかし、彼女は微笑んだままだ。

・・・まあ、確かにそうかも知れない。

「さ、剣の稽古でもしようか。」俺は立ち上がった。

「いいわね。今日は負けないわよ！」ハーリアは剣を取って立ち上がった。

早く結婚式が出来ればいいな。

ふと、そう思いながら剣を抜いた。

勇者とヴァンパイアの結婚式

俺は衣装に身を包んだ。

よし、不備はない。

「はい、『誓いの剣』。」「剛隊長は俺に剣を渡した。

「すみません。ったく、忍の奴はどこで何を……。」「

俺はブツブツと小言を言っていると、彼は苦笑いした。

今日は彼が儀礼をやってくれるはずなのに、まだ来ない……。。

パタパタパタ、と羽ばたく音がした。

「式神……。？」俺はスツと近づいて式神に触れた。

式神は触れられると、紙に変わった。

俺は紙を取り上げると読み上げた。

「光忍は入用により、本日の儀礼を欠席。代理は五右衛門殿に委託。

」

コウヘイが気を利かせて伝令を送ってくれたらしい。

「忍が入用……。余程重要なことでしょうか？」剛さんは言った。

「仕方ない。五右衛門さんに頼もう。」「俺は肩をすくめると式神をしまった。

「フェール？」囁き声がして俺は顔を上げた。

隣の部屋から、ハリアアが出てきた所だった。

真紅のドレスに身を包んで非常に綺麗だ。

「素敵だ。ハリアア。」「俺は囁くと、彼女の華奢な身体を抱き締めた。

「ありがと。」「彼女は照れくさそうに言った。

魔法使い式の結婚式は大して普通と変わる訳ではない。

だが、大きな違いはドレスと入場方法だ。

魔法使いは希少な生き物故、キチンと相手のことが分かって結婚する。

相手の色に染まってから結婚。という意味だ。

だから、ドレスも色つき。

「入場の時間です。」片腕のない男が言った。

「ありがとう。アル。」俺は頷くと、ハーリアの手を引いた。

「準備は良いか？」俺は訊ねた。

「ダメでももう、入らなきゃいけないでしょ？」彼女は悪戯っぽく囁いた。

「ダメだったら、駆け落ちしてやるさ。」俺は大胆に返した。

ハーリアは嬉しそうに身体を揺らすと、俺の唇にキスをした。

「じゃ、行くか。」「ええ。」

俺はハーリアの身体を抱きかかえた。

そう、入場の仕方はお姫様だっこで入るのが好ましいのだ。

新郎が新婦を支えていく。その力を見せつけるためらしい。

俺は楽々に彼女の華奢な身体を抱きかかえたまま、悠々と移動した。神父というか司祭というか、この式の結び手は壇上にすでにいた。

五右衛門さんだ。

彼は深々と頭を下げると、分厚い書物を広げた。

「この度はお集まり頂いたのはフェール殿とハーリア殿の結婚のためでございます。」

彼は腕を広げながら続ける。

ちなみに、フェールにしてくれ、と頼んだのは他でもない俺だ。

今となつては、アルを除いて、この名で呼ぶのはハーリアだけ、二人だけの名前だからだ。

「では、二人が結ばれることに異論はありませんね？」

「はやっ！」俺は思わず突っ込んだ。

「や、申し訳ない。だが、少々時間がないのだ。」五右衛門さんは囁く。

「・・・ああ、はい。」俺は頷いた。

「二方、夫婦になることを誓いますか？」

「「誓います。」俺らは同時に言った。

彼は笑うと、誓いの剣を取りだした。そして振り上げる。

「手を重ねなさい。」

言われた通り、俺は右手を、ハーリアは左手を重ね合わせた。
「では、汝らに永遠の……。」

「死を送ろう！」

俺は咄嗟に左手を引いた。

台座から青龍の『絡繰り』が飛び出し、刃を防いだ。

「ちっ……こんな仕掛けがあるってことはすでにばれていたか。」
五右衛門さん……の姿をした刺客は言った。

「いや、さつき、気付いた。」俺はハーリアを背に隠して言った。

「五右衛門さんは儀式を重ねる人物。いくら急いでいても儀式は略さない。」

「ふ……そうか。」奴は誓いの剣を投げ捨てて言った。

「だったら力尽くで死を与えん！」

奴は俺に飛びかかってきた。糸を引いて青龍で防ぐ。
が、青龍の胴体がスパツと斬れて奴が突進してきた。

俺は玄武の『絡繰り』を召喚しようとした。が、時間が足りない！

ガキンッ！

「ご無事か！？二方。」アルが剣を受け止めて言った。

「ああ、問題ない。」俺は言った。

「ち……多勢に無勢か。引くぜ！」奴は飛び退いて教会のガラスをぶち破ろうとした。

「バカ。阿呆ちゃう？」俺は言うとき糸を引いた。

奴の行く手にバツと玄武の『絡繰り』が現れた。

「はあ？絶対防御の絡繰りが何の役に……。」

奴が言った瞬間、奴の顔が顔面蒼白になった。

まー、そりゃー、そうだよな。

行く手を遮る玄武の甲羅がパカッと開いてその中で棘が突き出して
いたら・・・。

「バイバイ。」

血が滴り落ちる玄武の甲羅はゆっくりと閉じられ、式場から退出して
いった。

「えー、では。」アルが仕切り直した。

「ここに二方の結婚を認めます。」

俺は微笑むと、彼女も微笑んだ。

そして、唇を重ね合わせると、式場の中で拍手が巻き起こった。

俺の願い事はただ一つだ。

よって、俺は俺らに祝福する。

コホン・・・。

永久に愛が宿り、共に生きて行かんことを。

三大冥王、現る

結婚式から数日経った頃。

俺はハーリアと剣の稽古をしていた。

「はっ！」キンッ！

キンキンッ！

金属の音が響き合う。

鋭いキレを見せる身体。ヴァンパイアならではの。

俺は突き出された剣を身体を仰け反らせるようにして避けると、そのままブリッジをした。

そこから素早く倒立。その勢いで足を用い、ハーリアの手を弾いて剣を吹き飛ばす。

腕で身体を跳ねさせて、立ち上がると、一瞬で間合いを詰めて彼女の首に剣を当てた。

「・・・敵わないわね。」

ハーリアは微笑んで言った。

「まあ、今のは反則近かったけどな。」

俺は笑うと、彼女の剣を拾いに行った。

「今日はここまでにして休もうか。」

俺が言いながら剣を拾うと、ゾクツと殺気を察知した。

反射的に飛び退くと、そこにドドドツと短刀が突き刺さっていた。

「ちっ、敵襲か！」

俺は印を結ぶと、術を整えた。

「炎陣、《地獄魔炎》！」

ドウツと周囲に炎が走った。そしてそれは俺とハーリアを守る。

「水陣、《柱間氷水》！」

水が爆ぜる音がする。外で水をぶっかけているのか。が、無駄だと分かったようだ。

地獄の魔炎にただの水で消せるか。

俺はその間に印を組んで瞑想状態に入った。

よし・・・これぐらいなら察知できる。

動く気配は・・・三つ。

いや・・・はつきりとした生命反応を持つのは一人だ。

残り二人は生命反応があるにはあるが、変だ。人間ではないのか？

「封印術、《魔炎封印》！」

む・・・？

魔炎が吸い込まれていく。

くっ・・・封印術が使えるのか！俺は飛び退いていく。

魔炎が引いて三人の黒マントに身を包んだ者が現れた。

「私がやるわ。」ハリアは言う、印を組んだ。

「真祖の力はもう制御できるのか？」

「ある程度は。無理をしなければ大丈夫よ。」

彼女は自信満々にそう言うと、ドツと全身から妖気を放った。

「二人は私が抑えるわ。」「オツケ。」

俺達は短く言葉を交わし合うと、同時に地を蹴った。

奥の黒マントに駆け出すと、手前の二人の黒マントが庇うように動いた。

「邪魔、よッ！」

ハリアは回し蹴りで二人の黒マントを吹き飛ばした。

その隙に印を結ぶと、奥の黒マントに術を浴びせた。

「炎陣、《炎龍烈火》！」

「水術、《氷龍水晶》！」

な！？印を見切って有利な術を唱えた！？

相殺され、殺しきれなかったエネルギーがこっちに向かってくる。

俺は咄嗟に爆弾札を投げた。

ドカンッ！

爆風で俺の身体は吹き飛び、何とか避けることに成功した。

ち・・・やはり、一筋縄じゃ、うまくいかないか。

巻物を取り出すと、手をついた。

「炎術、《灼熱熱波》、風陣、《疾風大薙》……。」

「合成術、《熱砂嵐》！」

は？何も術を唱えずに合成術？

「召喚術ッ！」

咄嗟に俺は術を切り替えて唱えた。

自分の周りに肉の壁が現れた。

火影龍を召喚したのだ。器用なマネをして自分を体内に入れるように。

砂塵程度なら龍が耐えてくれるはず。

術の通過を確認すると、印を結びながら術を唱えた。

「合成術、《爆発螺旋球》！」

正規の手順を踏まなかったから不完全だが、

黒マントにそれを放つと、見事にそれが命中した。

やったか・・・！？

が、次の瞬間、無傷で黒マントは立っていた。

な・・・！？

「動かないで下さい。」

首筋にひやりとした物を感じた。

ふと、上空で目を落とすと、ハーリアが捕縛されていた。

着地する俺と黒マント。

「ご苦労。弥生。」

奥にいた黒マントは言うつと、俺を指さして言った。

「30点。」

「は？」

「赤点すれすれだね。まあ、いい。」

そう言うつと、黒マントはフードを脱いだ。

凜々しい顔の青年だ。

「我が名は、三大冥王にて二大仙人の御門大賀だ。」

「三大冥王……。」

俺は呟くと、スツと後ろにいた黒マントが退き、フードを脱いだ。
「こっちは弥生だ。そしてそっちが早苗。」

黒マントに隠された姿は二人とも可愛らしい少女だった。

「こいつらは『絡繰り人間』だ。」

え……？絡繰り……人間？

「『絡繰り』に意志を持たせた物。出来るのは俺と麒麟ぐらいだ。」

「すげえ……。」俺は思わず呟いていた。

「……お前さん、絡繰りに興味があるかい？」

御門さんは訊いた。俺が頷くと、彼は愉快そうに言った。

「じゃあ、弟子にしてやろう。みっちり教え込んでやる。」

絡繰り特訓！

俺は意識を集中させて糸を伸ばした。

そしてそれを木偶人形にくつつけてカタカタと操る。

「甘いっ！」御門さんはぴしゃりと言った。

「糸が柔い。魔力の量もムラがある！」

そう言うと、彼は糸を両手の人差し指から出し、それを持つと鞭のように俺の糸を弾いた。

プツプツプツッ！

すぐに途切れていく俺の糸。

「ハイ、もう一回。」

俺は糸を構成し直した。

『絡繰り』を操るには糸が必要である。

それは魔力で構成しているが、なかなかバランスが難しい。しかし、どんな魔法よりもやりがいはある。

「よし・・・これならばどうですか！？」

「ふむ・・・まあまあか。だが、まだ柔いぞ。もう少し魔力を多めで作れ。尚かつ崩れないようにちゃんと矯正し給え。」

「へい。」俺は少々うんざりしながら糸を引き延ばしつつ、魔力を増やした。

ばちんっ！

「うおっ！」糸が弾けてしまった。

「魔力を急に増やしすぎだ。もう少し慎重にやれ。」

御門さんは指示をすると、絡繰りを召喚して弄り始めた。

「はい、フェール。お茶よ。」

「お、サンキュー。」

献身的にサポートしてくれるのは我が妻、ハーリアである。彼女が近くにいれば頑張れる気がする。

俺はお茶を飲んだ後、再度集中して糸を構成した。

引き延ばしながら・・・徐々に魔力を・・・

「フフ、やるじゃないか。飲み込みは早いね。じゃあ、糸で少し遊ぼうか。」

「へ？」

御門さんはそう言うのと、五本指から糸を出してくねくねと糸を擦った。

「ほい、東京タワー。」

「おお！・・・ってただのあやとりじゃないですか。本読んでいるし。」

彼の膝にはあやとりの本が置かれていた。

「ま、そんな簡単じゃないさ。ほれ、見ながらやってみそ。」

はあ。俺はあやとりの本の受け取ると、軽く糸を出してやっていく。ぷつつ！

「あ・・・。」切れてしまった。

「糸が擦り合うから頑丈じゃないといけねえしよ。」

「ふむ・・・。」

今度は本気でやる。途中、切れないように意識を配りつつ、作り上げる。

「で、出来た・・・。」

「む？」

俺の指には東京タワーが出来ていた。

「・・・フフ、飲み込みはいいようだ。だが。」

御門さんは俺をついと小突いた。

うおっ・・・。

俺は疲れて抗えず、ばったりと倒れ込む。

「スタミナが足りんな。今日はここまでだ。」

そう言うのと、彼は背を向けて手を叩いた。弥生さんが現れる。

「み、御門さんは何故、そんなにばてないのですかっ？」

俺は気力を振り絞って訊いた。その声に御門さんは振り返る。

「ま、冥王だからな。正直、他の冥王の方が俺よりも百倍すごいが。」

「
そう言うと、彼は弥生さんに捕まった。
ヒュンッ、と音がして彼は消えていた。

「く……。」「
難しい……。な。

「う……。？」
何故か背中が柔らかい。

身を起こすと、そこはベッドだった。

「あ、フェール、起きた？」ハーリアがぱたと来る。

「おう。」俺は立ち上がって背伸びした。

「あ、まだダメよ。安静にしなきゃ、まだ魔力が戻っていないでし
よ？」

「いや、大丈夫だ。俺は魔力切れで気を失ったのか？」

「ええ。」

そう言いながら、彼女は緑色の薬湯を持ってきた。

「飲んで。苦いけど魔力は戻ってくるわ。」

「サンキュー……。マジで苦いな。」

俺はぐつと飲み干して唸った。だが、身体に力が漲る。
ぐう。

「あ……。」「

俺の腹で虫が鳴いた。

「あ、お腹空いているよね。今、御飯を作るから。」

ぱたぱたと慌ただしくハーリアは台所に行った。

迷惑を掛けてしまったな……。

俺は苦笑しながらゴロンとベッドに横になった。

しかし……。難しいなあ。絡繰り。

軽く糸を出して蝶結びとかしながら考えた。

……。でもそれだから誘惑をそそのめるものなのだ。
相談するかなあ。コウヘイ辺りに。

あいつだつたら共感能力を持つ奴だから出来るに違いない。
少しは分かる・・・かな？

「出来たよ。」

ハーリアはお盆に食事をのせてきた。

「サンキュー、お、卵スープか。」

「うん。食べさせてあげる。はい、あーん。」

俺は口を開けて差し出されたさじを口に誘った。

「はふはふ・・・うん、美味しいよ。」

「うふふ、ありがと。じゃ、たくさん食べて。あーん。」

甘い一時。やっぱ、平和が一番だ。

「さすが・・・ってあれ？血の味が混ざっている気がするけど。」

「うん♪隠し味は豚血に限るよねっ！」

「・・・ま、美味しいからね。」

「たくさん食べてっ♪」

嬉しそうなハーリア。その顔を見ていると血の味なんか吹き飛んでしまう。

こいつを守るためだつたら世界も投げ打つだろう。

「食べ終わったら剣の稽古するか。」

「え？休まなきゃダメだよ。」

「なぐに、身体を動かさないと魔力の伝達もよくなるだよ。」

「そう？じゃ、やりましょうか。」

平和って、いいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6344k/>

愛と剣とハナミズキ

2011年10月6日23時06分発行